

ともに生きる社会の創造

～一人の人間の存在を認めあえることへ～

梓川 一 [静岡英和学院大学]

1 梓川の役割とテーマ

難病者の梓川は、一人の当事者として、セルフヘルプグループ及び難病ピアの相互支援の活動・実践を探究してきた。これら内容を踏まえて、当事者の観点から、「これからの地域社会を、どのように創造できるか」について、私案を語りたい。

2 難病者の語りあいと支えあい～梓川のナラティブから～

梓川は、あるとき、突然に倒れた。難病告知を受け、人生は大きく変わった。長い入院生活の間に多くの難病者に出会った。

難病は完治できないゆえに、難病者は宿命的な苦悩も抱える。難病者同士で語りあい・支えあうことで、今を生きていることを体感できる幸せもある。

難病者仲間の支えあいは、自然発生的に生まれてくることに、人間的な喜びを実感できる。医療機関の専門性とその援助は必要条件であるが、それだけでは難病者は不安と恐怖を抱え続ける。難病者仲間とともに過ごし、語りあうことが支えあいにつながり、過去・現在・未来の安心にも通じていく。

3 難病ピアサポートの観点と原点

(1)ピアサポート実践の関係性と姿

ピア同士で向きあう・わかちあうことで、当事者世界がつくり出される。地域社会においても、当事者と当事者のピアサポートが求められている。ピア・サポート実践には、日常的な言葉で語りあう・聴きあう姿がある。ここに、互いの立場性と心情を共有する環境や状況で、ともに生きるつながりや関係性ができている。

(2)当事者同士のつながりと支えあい

セルフヘルプグループ活動やピアサポート実践には、ミクロのつながりと支えあいがある。加えて、ミクロとマクロもつながり、インフォーマルとフォーマルもつながる。

(3)相互支援の存在の認識～ピアサポートの原点～

当事者は、地域社会に生活するすべての人々として、自らも支えあうメンバーであり、相互支援の存在であると認識できることで、自己肯定感も満たされつつ、今を生きていることを実感することもできる。生活空間でわかちあい、ともに生きていく姿に、ピアサポートの原点がある。

4 コロナ禍社会からの気づき

(1)セルフヘルプグループの苦悩

コロナ禍にあって、難病者の生活・心は閉鎖的にもなる。ある難病者は、人と会うことができないという。ある難病者は、コロナ禍は誰にも会わないための一つの理由になるという。コロナ禍社会では、個別的な事情もあり、難しい状況におかれていることを再認識させられる。

(2)不安を抱える人々の実状

難病者には、専門職に会うことが不安である人もいる。支援を受けることに不安を感じる人もいる。専門職との信頼関係にストレスや不安を感じる人もいる。コロナ禍社会では、不安を抱えるに至る要因やプロセスが複雑化・深刻化する可能性もある。

(3)コロナから学ぶこと、そして問われること

他領域の学会でも、コロナ禍社会をいかに生きるかの対応などが共通テーマになっている。そこでは、対人援助のあり方、専門職のスタンスや姿勢、専門性も問われている。これからのソーシャルワークは、人間の存在や生きることに向きあうことが求められるだろう。コロナ禍社会に生きてこそ、これからの時代や社会の新たな転換ができるだろう。

5 人間の存在を深く感じて生きあう

(1)他人事ではなく支えあう

多様化が進む社会においては、個別性も追求される。自然災害が起き、コロナが蔓延する今日の社会において、すべての人々が当事者といえるだろう。コロナ禍社会を経験し、すべてに他人事ではなく、当事者の観点からの支えあいが必要になる。

(2)互いの立場・存在を尊重しあう

専門職は、コロナ禍での実践ではさらに深いジレンマも抱える。専門職は専門性を発揮するが、対応ができないこともある。当事者も専門職も、一人の人間としての互いの立場や存在をありのままに認めあう自己尊重が必要であろう。

(3)相互支援の関係性を認めあう

ソーシャルワーカーは支援を「する人・側」であり、クライアントは支援を「受ける人・側」であるとすれば、クライアントの役割や存在の否定にもなりうる。例えば、社会で孤立している状況の人も、難病者も、人と人の関係性に生きて他者を支えているのであり、地域社会において相互支援の関係性は、すべての人間関係に通じると思われる。

(4)ウェルビーイングを求めてともに探索する

多様性が認められる社会において、当事者同士がともに手を取りあい、人生を探索しながら辿り着くところに、その人にとってのウェルビーイングがあるのかもしれない。コロナ禍社会において、本人もどこに行き着くかもわからないままに、仲間や専門職とともにウェルビーイングを探索しているだろう。

(5)わからないところから出発する

当事者のことをわからないところから出発することが、ソーシャルワーカーの姿勢だろう。それゆえに、当事者のことをもっとわかりたい気持ちから傾聴し続け、わかろうとして、ともに歩んでいく。

(6)ナラティブを尊重して対話を継続する

声なき声を汲みとり、聴くことは、ソーシャルワークのテーマでもある。当事者が、自らの意思で、自らの言葉で、対話を継続することができるように、これまで生きて来られたナラティブを尊重しながら、環境や関係性をともにつくる支援が必要である。

6 とともに生きる社会の創造へ：原点回帰の意味

共生社会の実現には、いつの時代においても、どのような状況においても、そこには普遍的な基盤があると思う。社会には多様で多数の人々が生きて、独自の悩みも抱えつつ生活をしている。コロナ禍においても、コロナ禍が収束しても、一人一人の人間の存在、人間の尊厳に、我が事として向きあい続ける、この原点に回帰することの意味を深く感じる。